

医事・文談 九百五十五 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その243

子規と漱石(五十二たび続)

風生が吉岡禪寺洞に俳句を学んだ福岡時代は、一時文学から遠ざかっていたより江が、再び俳句をはじめ清原樹童についたのとは同じ大正7年だそうである。

この月よをちかた人にまどかなれ

作の年代が分らないが、月を眺めてをちかた人即ち遠方の人にもこの月がまどかに照らしてほしいの意である。恐らく海外にある夫を思っているであろう。

旧帝大時代の教授は、海外留学が教授就任の条件で、就任後何年か経つと、更に海外視察の短期出張旅行の制度があった。学術の進歩をさぐるの目的であったであろう。

この句はあとの場合での異郷にある夫に思いを寄せた、三五夜中の述懐であろう。

かの窓による人ありや春の月

この句も同じような句柄だ。これらの句から想像すると、峻しい処生悪路などは考えられない。

猪之吉博士は昭和14年、より江夫人はその翌年、夫のあとを追って57歳で亡くなられた。

子供がなかったためか、大の猫党であったらしい。

猫の子のもらはれてゆく訣かな

猫に来る賀状や猫のくすしより
泣むしの小猫を親にもどしけり

漱石とより江夫人とは、面識があったことが、漱石の書簡で分る。

明治45年4月21日発、福岡市外東公園久保頼江宛書簡による。これによると、頼江が本名であるらしい。

それによると「過日久々にて御出被下候節は失礼のみ」とあるから、相当以前から面識があったことが知れる。恐らくホトトギスの寄稿家・同人として知り合ったものだろう。約束の『猫』の中巻を、

本屋から取り寄せ送ったから、受け取ってほしいとあるから、かなり親しい間柄のように考えられる。「儉約をして御金を御ためなさい。時々拝借に出ます」とあるが、どんな意味があるのであろう。儉約しなくても、かなり裕福な生活をしてきた筈だが、漱石も朝日新聞社に入社し、当時としては破格の月給二〇〇円のほかに、益暮れのボーナス、出版の印税を得ていて、決して他人に借金を申込むような生活ではなかった筈だ。但し子供が多く経済が膨張することはあったであろう。

もう一通、大正5年8月18日附の書簡がある。より江からの手紙を見たこと、エジプト煙草と葛素麵を惠贈された礼を述べ、エジプト煙草をのんだ思出を書いている。ロンドンや満州や朝鮮ではのんだことがあるが、東京では贅沢だから、貰わなければのまないと言われている。

より江の写真が届いたが、よく取れ過ぎていてわけではなく、「まああんなものでせう」と冷ややかに評しているところは、かなり親密な交際らしく、忌憚のない評を加えている。既に結婚している男女が、写真を交換(漱石の方から送ったかどうかは分らないが)しているところから推せば、家庭的な交際もあつたのだろう。

現に子供たちの夏休みの旅行先のこと、長女が18歳で、嫁入り口が、一つ二つあつたのには驚いたこと、妻からも返事を出さずと思うが、取り敢えず煙草の礼を書くとしている。

漱石は長塚 節紹介の手紙を久保教授に出しているが、大正3年1月31日にも久保宛に手紙を書いている。専門書の鼻科学の下巻を贈られた礼状である。何故に明治43年博文館発行の本を素人の漱石に送つたのであろう。しかも発行後数年を経過してである。注解によると漱石の蔵書中に久保著『鼻科学』二冊があるから、上巻も久保が送つたのであるらしい。

この手紙によると、病名は不明とあるが、より江が入院していて、不日退院ということ故、大したことのないのだろうが、精々加養生するようにとある。子供もなかったようだし、何か持病があったらしく思われる。

選ばれる病院のお手伝い

- 人材紹介 ●人材派遣(医療事務・受付・クラーク) ●接遇教育 ●査定分析、レセプト作成・点検・総括
- アメニティの提案(設備・備品・ベット等のレンタル・リース・販売)
- 感染性廃棄物・廃プラの収集運搬・処理 ●開業支援



株式会社

インターメディカルズ

札幌市中央区北4条西1丁目共済ビル5F TEL 231-0005

事務所 / 札幌、旭川、北見

<http://www.intermedicals.co.jp> E-mail: info@intermedicals.co.jp